

研修報告 日本史サマーセミナー2024

明治大学大学院 矢野 暁

はじめに

8月21、22日にかけ横浜翠嵐高校を会場に日本史研究推進委員会による日本史サマーセミナーが行われ、生徒、県内外教員、大学・教育関係者多数の参加を得た。今年の全体テーマは、「歴史総合」から「日本史探究」へ PartⅢ」であり、昨年に引き続き、「歴史総合」から「日本史探究」への接続が意識された。午前は高校生に向けた大学教員による講義、午後は現場教員からの実践報告、研究協議が行われ、充実した2日間となった。

1 1日目の講義・協議内容について

1日目は、午前の部で、日本女子大学の成田龍一先生による「夏目漱石を「歴史総合」で考える」、淑徳大学の遠藤ゆり子先生による「一寸法師から考える中世社会」として高校生に向けた授業が行われた。

成田先生の講義では、「現代国語」で習う夏目漱石を、歴史総合のかまえて捉えることがテーマとされ、1911年の講演「現代日本の開化」を手がかりに「近代化」の構想、「現代日本」との向き合い方を探る試みがなされた。まず、講演の前提として、夏目漱石の略年譜を確認し、さらに彼の小説世界をみてとり、漱石の経験や思想形成の過程を確認した。講演「現代日本の開化」では、「開化」を内発的・外発的と分けて捉え、西欧の「開化」は内発的であるのに対して現在の日本のそれは外発的であるとして批判する。そしてその意味を、作家としての活動やイギリス留学といった彼の人生・経験へ立ち戻って考えてゆく。「問い」を構造化し、生徒の思考を促す試みであった。

遠藤先生の講義では、「一寸法師」を手がかりに中世社会の特色を捉えることが目的とされた。「一寸法師」やそのほかに提示された史料には、高校1年生と同世代の人びとが登場し、実際に史料を読み、グループワークに取り組むなかで生徒は想像力をもって考えていた。史料を読む際の注目点としては、登場人物の年齢や旅立ちを決めた一寸法師の言動などがあげられ、室町時代のライフサイクルや社会状況のありようが、生徒の言葉によって描き出された。中世史学習における史資料への向き合い方の手がかりとなる実践であった。

午後の部は、午前の講義のふりかえりののち、実践報告・研究討議が行われた。実践報告は、名古屋市立名東高校の伊藤和彦先生から「感染症でまなぶ「歴史総合」と題して、近現代史を感染症で貫く授業実践の報告、横浜栄高校の齋藤寛先生から「歴史総合と日本史探究はいかに結びつくのか―学習方法に焦点を当てた授業実践比較」と題して、ジグソー法などの学習方法を軸に、「歴史総合」や「日本史探究」の学びの繋がりを検討する報告であった。

研究討議では、まず個別の講義についての質疑、実践報告に対するコメントがおこなわれたのち、本年のテーマである「歴史総合」と探究科目の接続について議論が展開された。

成田先生は、「歴史総合」と探究科目をめぐっていま議論すべきことは、それぞれの教師のかまえを報告することであり、2025年度共通テスト・大学入試から入試科目となることを念頭に、自身の理念を鍛える必要があるとした。また、「歴史総合」が示す「歴史とは何か」という問いを探究科目がひきうけるにあたって、世界史に対して日本史のばあい、「日本史は何か」という問題に関する議論がなされていないことを指摘した。

2 2日目の講義・協議内容について

2日目は、午前の部で、国立歴史民俗博物館の大串潤児先生による「「戦後」という時間と空間を考えてみよう—1950年代の基地闘争を中心に—」、早稲田大学の三村昌司先生「日本の近世社会から近代社会への変化—地域に残された歴史資料から考える—」と題して高校生に向けた授業が行われた。

大串先生の講義は、東富士演習場をめぐる運動、浅間山演習地化反対運動を手がかりとして、「戦後」の時代・空間を捉える視点を考えるものであった。東富士をめぐる問題では、地域に生きる人びとの生活に注目されるとともに、戦前の陸軍・戦後の占領軍という演習場をめぐる地域住民との関係性の変化について、「問い」が投げかけられた。浅間山演習地をめぐるのは、軽井沢地域における「大日向」集落の青年たちの経験（満州開拓）や、基地反対の論理を普遍化するうごきに焦点があてられる一方で、戦時性暴力の問題にも目が向けられ、残された議論の存在への思考もめぐらされた。まとめに際して、大串先生は「「戦後」を考える時間と空間のはばを君たちならどのように設定するか」と生徒に問いをなげかけた。戦後史を学ぶ思考の枠組みについての重要な問いである。

三村先生の講義は、近世から近代への移行期における社会の変化について、政治の決定過程に注目し、地域の歴史資料からそのありようを考えることが目的とされた。まず、近世の社会を考えるにあたって、三田藩から公議人として選ばれ、出府した九鬼求馬の書簡を読み解くことでそのありようが説明された。九鬼が残した書簡からは、本人の意見ではなく、「藩の意見」を貫き通さなければいけない公議人の立場などが読み取れた。「個人」を基盤とした近代に対して、近世においては、意見そのものに正しさが宿るとする近世的経験が議論の前提にあり、「多数決」のような制度は当初うまく機能しなかった。史料を通して社会・時代像を描き出す実践的な講義であった。最後に、三村先生の研究の柱の一つである資料保存について、その取り組みが紹介されるとともに、地域の歴史資料を活用した授業のあり方、歴史理解の重要性が述べられた。

午後の部は、午前の講義のふりかえりののち、実践報告・研究討議が行われた。実践報告では、横浜国際高校の渡邊泰斗先生から「生徒の歴史記述に教師はどう関わったか？—ふりかえりシートを軸にした実践」と題して、日々の授業と問いかけを中心としたフィードバックの実践を通じた生徒の学びと教師の関わりについての報告、日本女子大学の酒井晃先生から「卒業論文指南書を読み解く—大学歴史教育から「歴史総合」へ」と題して、歴史学および大学歴史教育の観点、とくに卒業論文の位置づけから「歴史総合」を考える報告が行われた。

研究討議では、まず成田先生・大串先生から実践報告へのコメントがなされた。「歴史総合」の実践の積み重ねとその先への展望、「歴史総合」が大学の歴史教育や歴史学のあり方を問うということの内実について、それぞれの視点から意見が述べられた。総合討論では、参加者から実践や経験をふまえた質問と発言があり、発展的な議論が行われた。

おわりに

近年、日本史サマーセミナーでは、「歴史総合」を軸にすえ、大学教員の講義から学ぶとともに、現場からの実践報告が積み重ねられてきた。2025年度から「歴史総合」や探究科目が入試科目となることと関連して、生徒の学びにどのような影響を与えるのか、これまで以上に授業実践の共有・点検が必要になるだろう。その場として、日本史サマーセミナーのもつ役割は今後さらに重要になるであろう。